Brugada症候群における症候の有無による不整脈基質の検討

渡邊敦之[1]　森田　宏[1]　水野智文[1]　木村朋生[1]
森本芳正[1]　宮本真和[1]　中川晃志[1]　西井伸洋[1]
中村一文[1]　伊藤　浩[1]　関口幸夫[2]

【背景】Brugada症候群における心外膜アブレーションは，心室細動（VF）抑制において臨床的有用性は高い．しかし，VFの発症頻度や症候の有無における不整脈基質の特徴については，不明な点が多い．【方法・結果】今回，当院で施行したBrugada症候群５症例において，症候の違いによる心外膜不整脈基質について評価を行った．症例は全例男性，平均年齢44歳，症候性（documented VF）4例，無症候性（左房粘液種手術時）1例．電気生理学的検査のVF誘発は２例であった．全例CARTO®システムを使用して心外膜substrate mappingを施行し，異常電位分布の面積を計測した．症候例，特に頻回作動症例は異常電位分布面積（54 ± 30 cm^2：32 ～ 98 cm^2），および異常電位の右室前面に対する面積比（50 ± 26%）が広く，無症候例（21 cm^2，20%）は範囲が狭かった．また，電位性状にも違いを認めた．症候例において，１例再発を認めたが，ピルシカイニド負荷によるcoved type心電図への変化は認めなかった．【結語】Brugada症候群では，VF発作頻度や症候の有無によって基質範囲や特徴が異なる可能性が示唆された．

Keywords
- Brugada症候群
- 心外膜アブレーション
- 不整脈基質

1 岡山大学医学部医学科循環器内科
（〒700-8558　岡山県岡山市北区鹿田町2-5-1）
2 筑波大学医学医療系循環器内科学

The Evaluation of an Arrhythmic Substrate According to the Synptom in Patients with Brugada Syndrome

Atsuyuki Watanabe, Hiroshi Morita, Tomofumi Mizuno, Tomonari Kimura, Yoshimasa Morimoto, Masakazu Miyamoto, Koji Nakagawa, Nobuhiro Nishii, Kazufumi Nakamura, Hiroshi Ito, Yukio Sekiguchi